

第3章 昭和前期の出来事

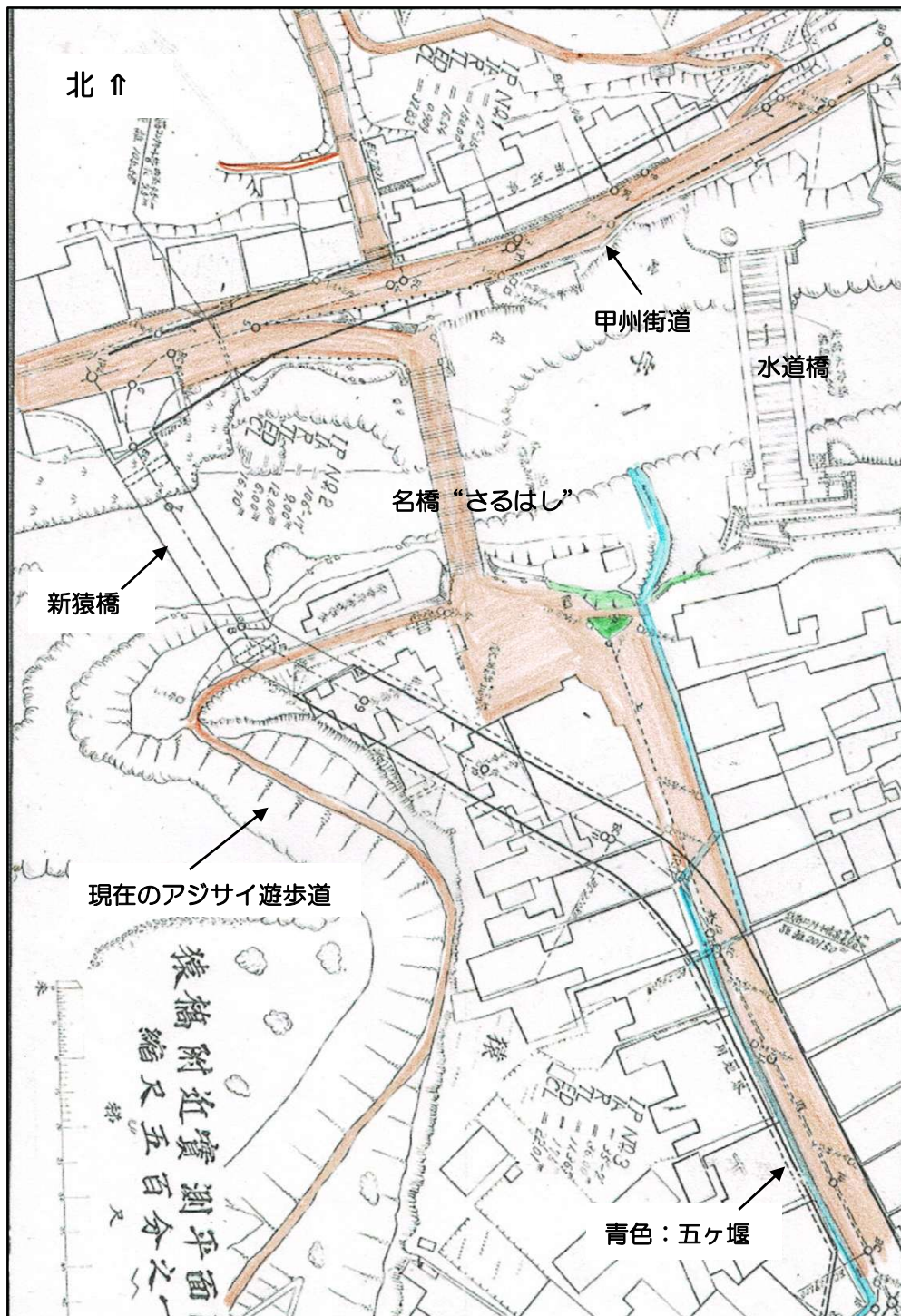
1) 新猿橋架橋 昭和8年(1933)

木造の“**さるはし**”は昭和初期まで荷馬車や、普及し始めた自動車も通行していた。戦車も通行していたことを示す写真もあるという。

しかし、甲州街道（その当時は国道8号線）を鳥沢方面から来ると、橋との高低差が大きく、且つ鋭角に左折し、急坂を下りなければならない。また、木造橋なので重量制限もあり、これから増大するであろう自動車の通行には適さなかった。

昭和初期の大きな出来事の一つが新猿橋架橋であった。このため国道8号線（当時）の改修を検討する山梨県は、猿橋の形を残しつつ全体はコンクリートの橋にかけ直す事を考えた。しかし、特殊工法で出来ている“**さるはし**”を名勝としてもっと売りだそうとしていた猿橋保勝会は猛反対をした。

図8301 新猿橋架橋計画



昭和7年(1932)、猿橋の少し上流に鉄筋、コンクリート造りの新猿橋を架橋することになり、**12**月に着工した。

当時国道8号と呼んでいた甲州街道は、(旧)猿橋を通っていたが、自動車が普及しはじめ、橋上を通過する物、人の重量が限界を超えること、木造のため約20年毎に架け替えが必要であり、国道遮断の危惧**があるなどから**、新猿橋を架橋することになった。

左図は架橋前の東京国道事務所の実測図である。この架橋により北側も南側も大きな影響を受けた。

猿橋警察署と第十銀行の支店は移転を余儀なくされ、大黒屋旅館は敷地の一部を削られることになった。

また、大黒屋から梅沢薬局までの**橋畔**西側の家駿河屋、橋本食堂なども敷地を削られ移転した。

北側も大きな影響を受けた。それまでの甲州街道が拡幅されたため小松屋旅館などは敷地全面を削られた。

下和田へ向かう道の南側（崖側）にあった家は立退きとなった。また、この道と新猿橋の高さを合わせるため切下げとなり、北側に並んでいた家々は高い所に取り残され、道に出るために階段を利用しなければならなくなった。

心月寺への道は、この切り下げた道路に接続するため急こう配の参道となった。

橋としての使命を終えた旧猿橋は廃橋が議論されたが、県を通して文部省に歴史的価値を残す陳情が行われ、名所として残すことが決められた。

図83〇2 架橋工事中的新猿橋



二本のアーチが架けられたところ。
北側（左側）は絶壁であることがわかる。

図83〇3 完成した新猿橋



図83〇4 渡り初め 桂川沿岸の桜が満開



図83〇5 渡り初め(2) 橋の北側より観る



コラム 霞町の袋小路

霞町の遠山歯科医院の先に下図のような袋小路がある。



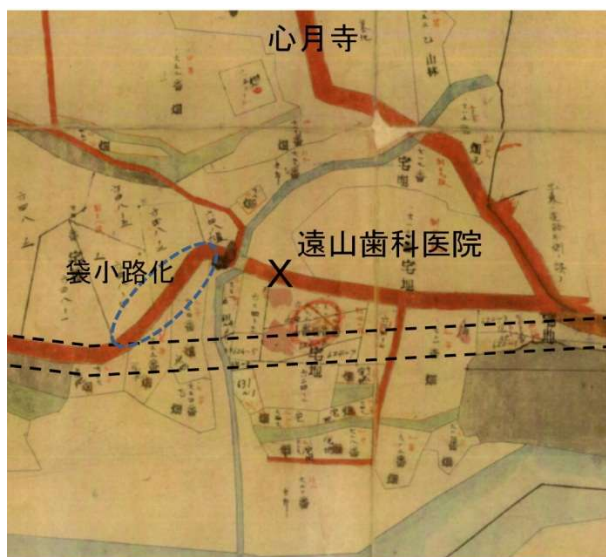
なぜこのような袋小路ができたか。

これは、心月寺と出世大神宮の間を流れ、遠山歯科の裏を流れて桂川に滝となって落ちる小川の存在による。

猿橋から下和田へ行くにはこの小川を渡らなければならないが、小川ではあるが高低差の激しい急流を渡るため少し上流に迂回して橋を架けた。

この袋小路は、この橋に向かう迂回路の一部で、橋を越えて遠山歯科の前を通る旧道を経て猿橋へ繋がっていた。

明治の公図



大正絵図



後に架橋技術の進化から下流に橋を架けられるようになり、おそらく新猿橋が架けられた昭和8年頃、下和田道の拡幅と直線化のために新しい道路が作られ、上流の橋に向かう道は「袋小路」となってしまった。

2) 町制施行

昭和10年4月1日、大原村が町制を施行し猿橋町になった。ライバルの大月は2年前の昭和8年、広里村から大月町となっており2年の遅れをとった。

図8306 猿橋小学校校庭で行われた町制施行記念式典



図8307 祭典の仮装行列



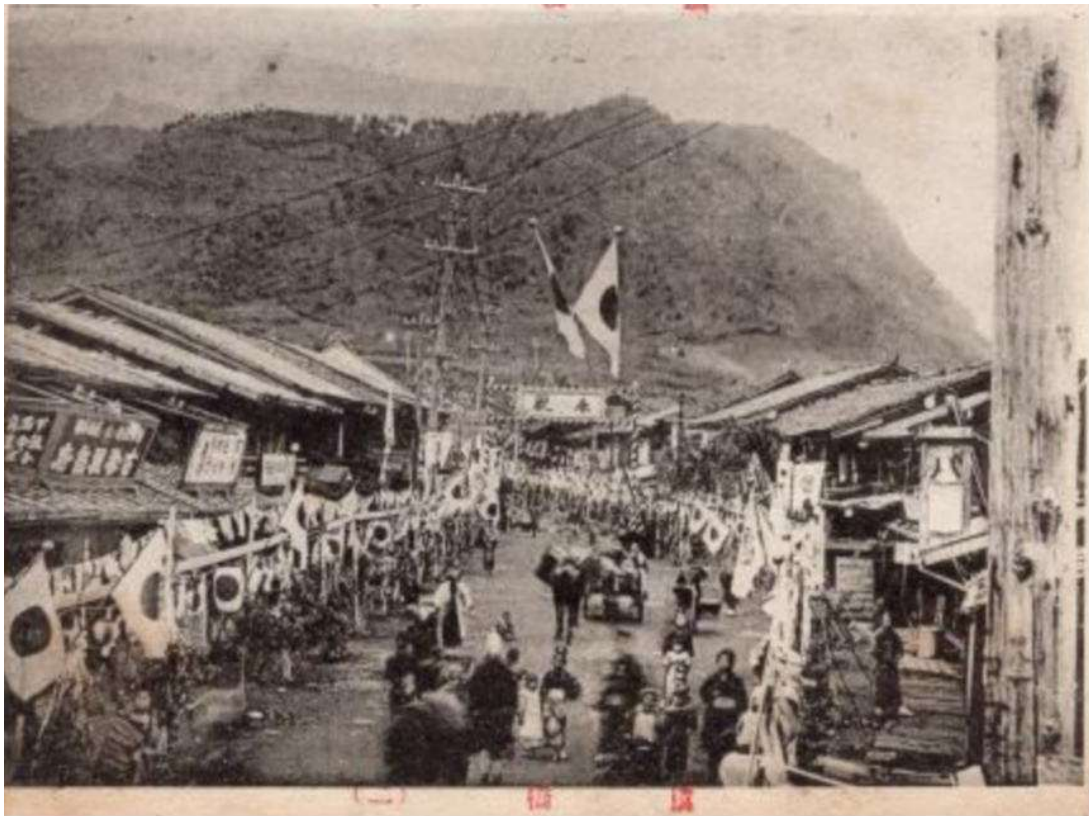
3) 紀元2600年記念祝典

昭和15年(1940)は神武天皇が即位してから2600年に当たることから、日本政府は昭和10年に「紀元二千六百年祝典評議委員会」を設置し祭典の準備を始めた。

昭和15年は、年初の橿原神宮の初詣ラジオ中継に始まり、2月11日の紀元節、各種展覧会、体育大会など様々な記念行事が全国各地で催された。

各県、各市町村などでも盛大な祭典が行われた。下は猿橋で行われた奉祝行事と思われる写真(絵葉書)である。上は画角から見て、旧三登屋の二階から撮影した可能性が高い。

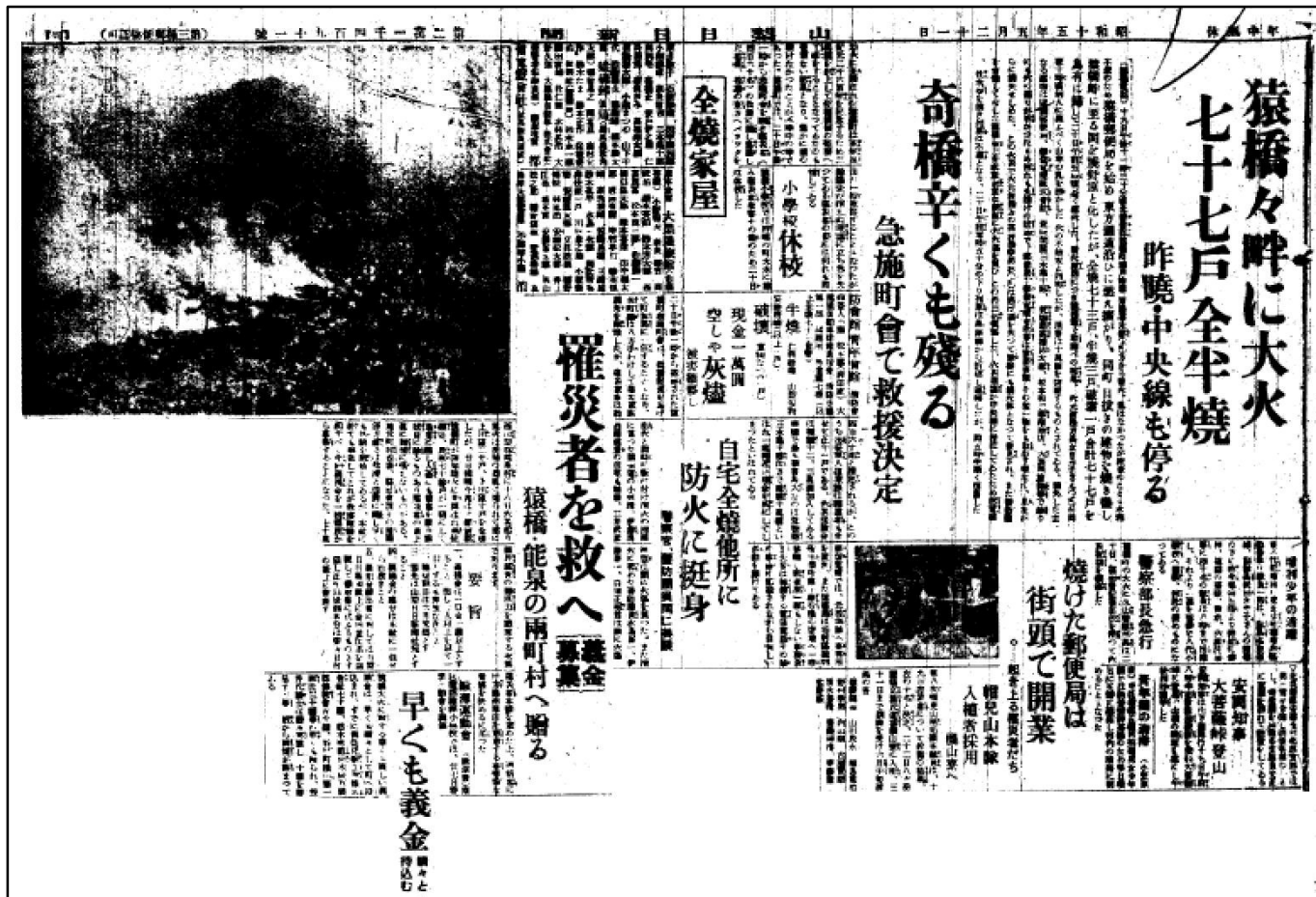
図8308 紀元2600年記念祝典と思われる街頭写真



4) 昭和猿橋大火

昭和 15 年 5 月 19 日の夜更け、猿橋の中心街に大火が襲った。翌々日の山梨日々新聞は次のように報じている。

図8309 火災翌々日の山梨日々新聞



約 85 年前の新聞。更に「コピーのコピー」のため、鮮明でないが拡大して判読するとおおよそ次のように記されている。

猿橋々畔に大火 77戸全半焼 昨晩・中央線も停まる（猿橋電話）

19日午後 11 時 30 分頃、北都留郡猿橋町瀬戸物屋渡辺喜太郎（64）方から発火、風はなかったが深夜のことと、水利不便のため、猿橋郵便局を始め、東方国道沿いに燃え広がり、同町目抜き建物を焼き尽し、猿橋畔に至る間を焼け野原と化した。全焼 73 戸、半焼 3 戸、破壊 1 戸、合計 77 戸を烏有に帰して、20 日午前 5 時頃全く鎮火した。

発火原因につき、猿橋署で取調べの結果、火元渡辺方長女きみ子さん（25）が、同夜 10 時頃、病人に与ふべく山羊の乳を沸かした火の不始末と判明したが、損害は 10 万円を突破するものとされている。

焼失した主なる建物は、猿橋郵便局、都留電灯株式会社、荒物問屋三木亀十郎、乾物商高橋卯太郎、松本和三郎両商店、大黒屋旅館等で、余りにも火廻りが早かったため、何れも丸焼けの状態、郵便局、都留電灯会社等は重要書類その他、一物をも取り出す暇なく、見ながらに焼失せしめた。

この火災で火元渡辺方の孫渡辺幸男君（13）は逃げ場を失って無惨にも焼死体となって発見され、また警防団を督励して■した猿橋署三井武彦巡查は顔面に大火傷を負い、この外 3 名負傷した。

火災現場が中央線に接近していたため、送電線、枕木等を焼き、列車は不通となり、20 日午前 0 時 50 分の下り列車は鳥沢駅から折返し運転したが、同 5 時半ようやく復旧した。

全焼家屋

望月敏子、石渡森造、田中榮四郎、小畑藤造、奈良寅吉、三木亀十郎、同別宅、高橋正、安戸伊之助、仁科義男、奈良きみ、高橋卯太郎、渡辺喜太郎、小池まつの、山下千代、佐藤義久、森駒雄、藤本慶太郎、猿橋郵便局（局長奥秋角太郎）、幡野昌之、雨宮亘、志村元作、鈴木たま、藤本正作、保坂要治、准興社（繭種商）、鈴木永一郎、藤田寅雄、朴仁徳、木林兵治、大野久信、大黒屋自動車株式会社（管理者佐藤貞義）、藤原現寛、都留電灯会社（社長奈良重威）、橋本金衛、大黒屋旅館（佐藤啓視）、小野和夫、奈良熊吉、同武治、藤本英治、鈴木芳太郎、西室茂富、松本茂一郎、佐藤廣一、樋口忠太郎、稲本喜造、田中恒太郎、唐沢有口、中村孝行、鈴木恒雄、奈良俊雄。佐藤長明、三浦誠、鈴木真平、水島一次郎、同氏所有非住家一戸、川村倉之助、小坂徳密、安藤延太郎、立花政義、幡野峰松、林進治、安藤松太郎、井上庄吉、梶本寛、安藤富太郎、高山松之助、幡野信義、管沼幹雄、高橋卯太郎倉庫、不動尊小屋、消防会館、青年会館、消防会館番人小屋、松本屋（非住家）、大黒屋自動車従業員宿舎、消防小屋第一部、同詰所、外倉庫七棟（以上全焼73世帯）

半焼

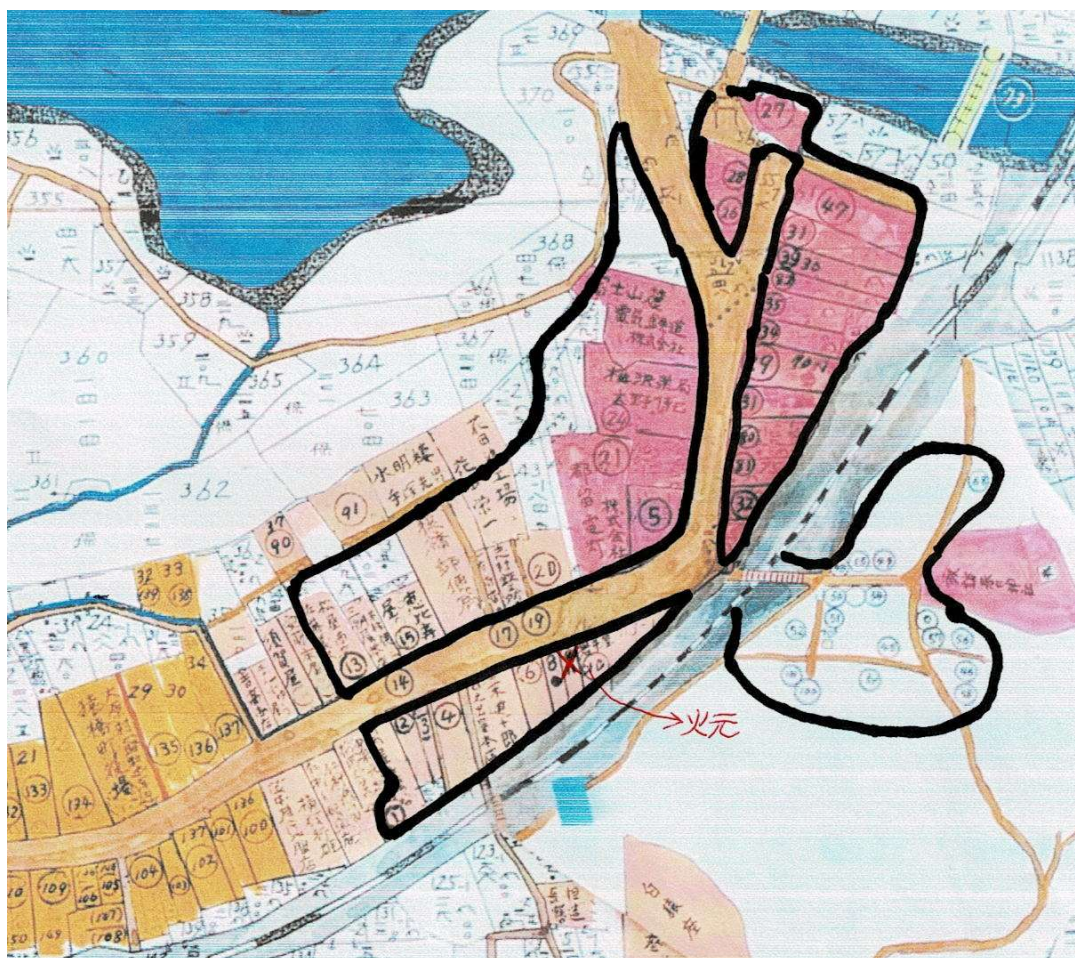
仁科敏璋、山梨安利、安藤将雄（以上3戸）

破壊（延焼を防ぐため家を破壊）

富田なつ（1戸）

図831〇 延焼範囲を示す図

仁科喬夫氏 作成



この火災で類焼した商店・旅館・料亭などのうち、同じ場所で再開できた店舗は半分以下で、猿橋の町並は一変した。

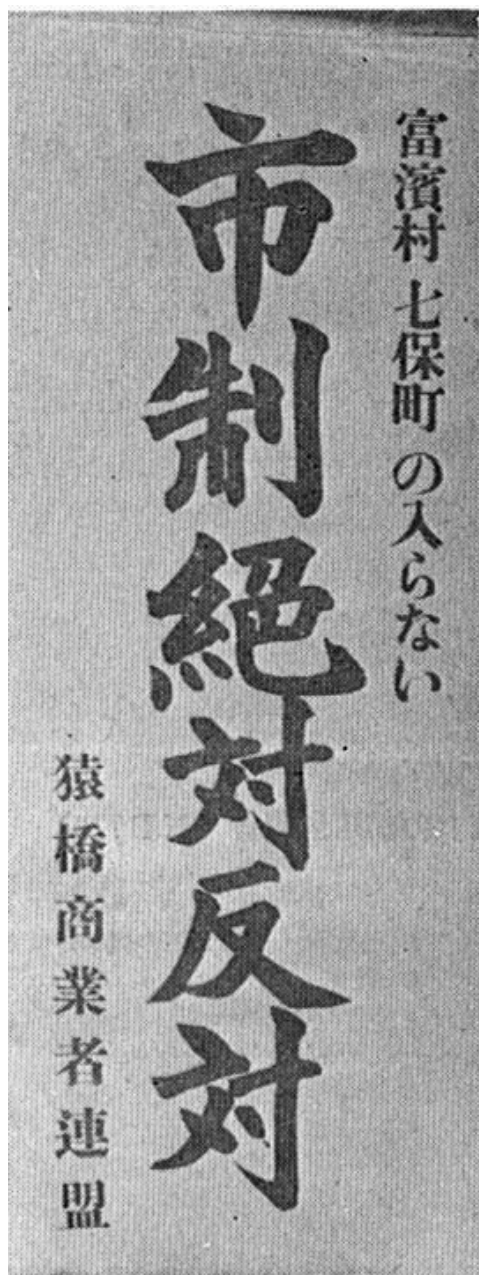
5) 大月市制施行 猿橋町の消滅

前述のように、明治・大正期には猿橋が北都留の中心市街として栄えていたが、中央線、富士山麓電鉄線の開通、都留中の誘致などで、次第に大月に人とサービスが集中するようになっていた。第二次世界大戦前には大月優位の傾向がはっきりしていた。

このような状況の中で、政府の地方行政改革による町村合併が盛んに行われるようになり、北都留にも「合併促進」の波が押寄せてきた。

北都留郡西部の笹子村・初狩村・大月町・賑岡村・七保村・猿橋町・富浜村・梁川村の2町6村の大合併構想が持ち上がった。(合併の直前に七保も町制をしいたので3町5村となる。)

図8312 市制反対のステッカー



県の指導により、猿橋町を含む各町村の議会で合併の議決が成されたが、七保町と富浜村は合併反対の意思表示をした(5月5日)。

猿橋の商店街は「市制反対期成同盟」を結成して大反対運動を展開し、町内は混乱した。

市役所は大月と猿橋の中間に置くべき、市名は各町村平等の「都留市」が良いなどの意見もあった。

七保、富浜に挟まれ、かつては北都留郡の中心地であった猿橋町でも、商店街を中心に「市制反対期成同盟」が結成された。

町の市制賛成の議決は町民意思の無視だとする批判の声が高まる中、反対署名も人口の3分の1にあたる2千名を越え、対立も次第に険しくなった。

6月5日には坂本町長が辞意を表明し、7月14日には町議会開会直前に役場内で傷害事件までもが発生した。

これに絡んで町議会議長が辞表を提出、また、消防団幹部の17名が市制反対を理由に消防団ハッピーを役場に返上するなど、市制問題に暗い影を投げかけた。

この猿橋市制反対期成同盟と富浜村市制反対期成同盟が連名で「敬愛する七保町の皆さんへ」という文書を出している。

これは

- ①地勢的なつながりがない。
- ②大月の人々だけが利得する
- ③現在の生活改善が急務

の3点を指摘し、県が出した市制推進の文書に逐一反対している。しかし猿橋町議会で一度議決された合併賛成はくつがえる事なく、七保町も結局は合併に向かい、昭和29年8月8日、富浜村を除く7町村の合併が実現、猿橋町は大月市に包含された。

ほどなく富浜村も自治省の勧告、県からの圧力で大月市への編入を決議し、大月市もこれを認め

て、9月に富浜村を含めた8町村による大月市が成立した。市名については

A案 北都留郡から「都留市」

B案 桂川沿線の都市から「桂市」

などもあがったが、一足先に谷村が周辺の町村を合併して市制を施行、「都留市」となったためA案が消え、笹子・初狩・七保などは桂川に直接面していない、などの理由でB)案も消え、結局、市の中心部の名をとって「大月市」に落ち着いた。

当時の人口構成は、

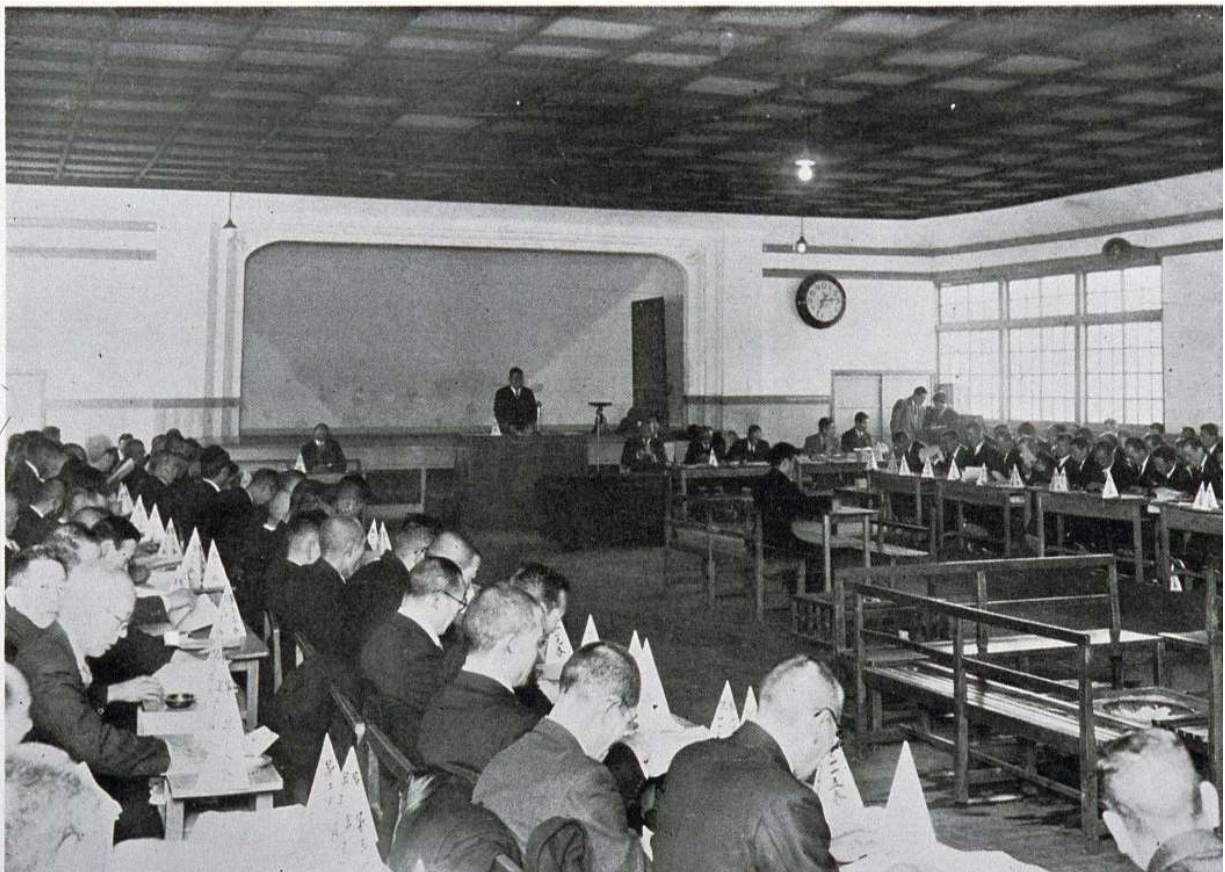
大月町：約1万1千人、七保町：約7千人、猿橋町：約6千人、
の状況にあり、大月が新市の中心となる事には「むべなるかな」であった。

この「都留市」「大月市」の成立により伝統ある都留高校の所在地が「都留市」ではなく「大月市」という変な状況となった。

都留高校は大月高校に名称を変える動きはなかったのだろうか？

合併当初、各町村の議員はそのまま大月市会議員となったため、大月市議会は多くの議員を抱え、写真のように講堂で議会が開催されるほどだった。

図8313 合併当初の大月市議会



合併当初の大月市人口は4万1千人となり、甲府に次ぎ県内第二位の人口を誇ったが、その後次第に減少、令和になると成立当時の約半分の2万1千人までに減少した。

また、合併当初は大月町の人口が猿橋町の2倍に近くあったが、大月の人口減も激しく、一方猿橋には四季の丘や桂台などの住宅団地が造成され、現在は双方とも5千人前後となり甲乙付け難くなっている。

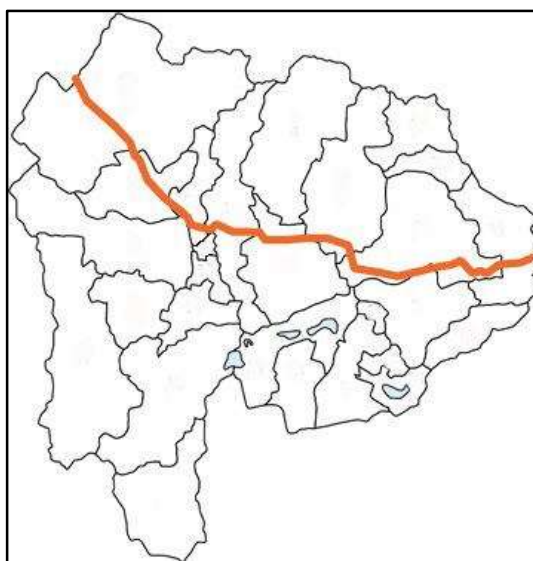
6) 東京五輪聖火リレー

国民の熱狂的な支持を受けて開催された昭和39年（1964）の東京オリンピックの聖火は、開会式のおよそ2ヶ月前にあたる8月21日、ギリシャのヘラ神殿で採火式が行われ、その後、聖火空輸特別機“シティ・オブ・トウキョウ”号（JAL）により沖縄に運ばれ、国内は4ルートで全都道府県を回りながら一路東京を目指した。

山梨県には、鹿児島からスタートした聖火が九州西側、中国地方、北陸地方を經由し、10月6日、長野山梨県境の国界橋で白州町（現・北杜市）にリレーされ、その後沿道各市町村を經由して甲府市に入り、同日午後6時に県庁へ到着した。

翌7日朝、甲府市を出発、笹子峠を越えて大月市に入り、上野原町から午後3時5分に神奈川県に送り継がれた。

図8314 山梨県内のリレー経路



猿橋近辺では殿上橋からの第68区、警察派出所からの第69区、宮谷新道からの第70区に多くの猿橋関係者が参加した。中継所から次の中継所までの距離はおよそ1.2 kmだった。

図8315 猿橋近辺の中継所

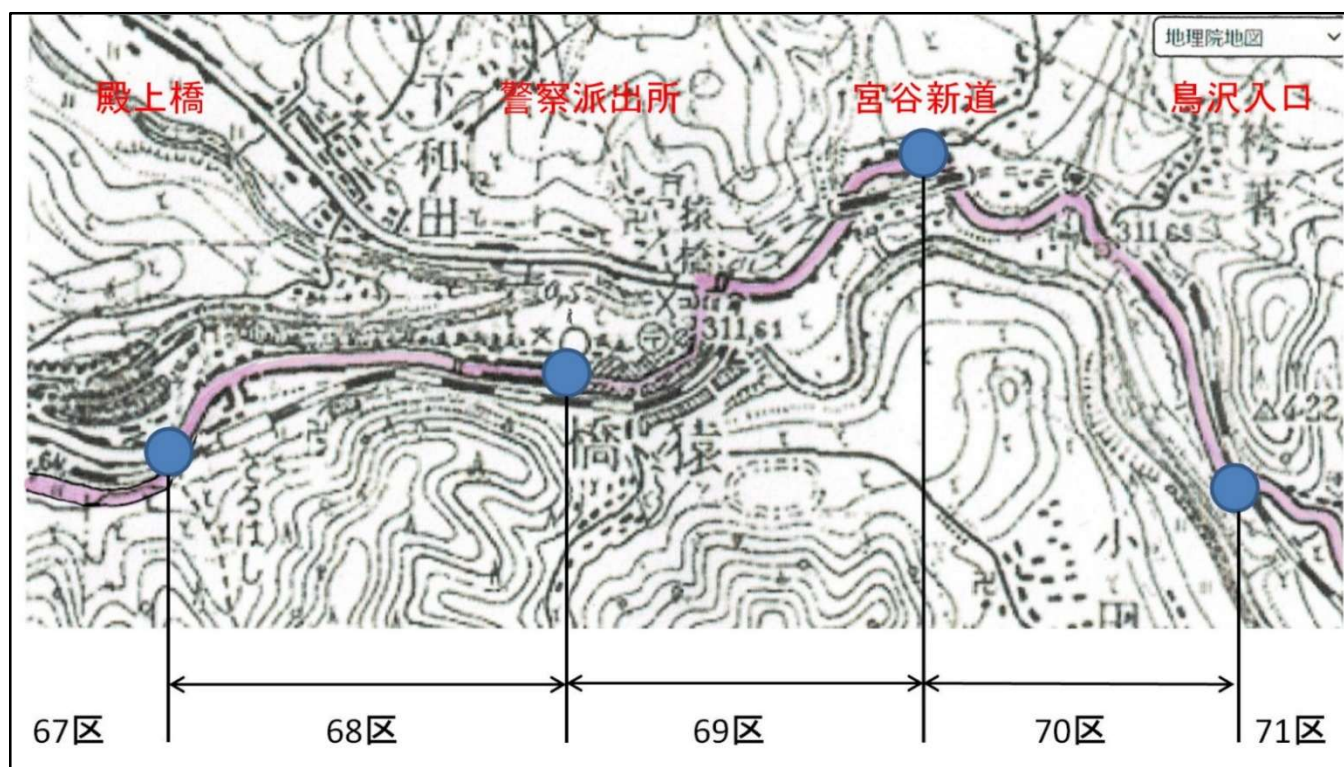


図8315 猿橋近辺3区の走者一覧「聖火リレー隊 名簿から」

山梨県立図書館蔵より

	68区	69区	70区
正走者	佐藤文男（都留高 剣道部）	天野幸夫（都留高 卓球部）	志村和三（大月高 柔道部）
副走者	小宮文男（都留高 庭球部） 横瀬良成（都留高 送球部）	上條睦男（都留高 柔道部） 山咲典良（都留高 相撲部）	関口邦夫（大月高 野球部） 一杉 進（大月高 剣道部）
随走者 20名	田中常貴 鈴木文雄 鈴木好久 後藤宗広 奈良孝幸 志村康洋 梅沢幸雄 内野 勝 後藤文男 小俣健一 中村一夫 米山明博 井川好弘 金沢一史 久島静枝 石井美佐子 内田治子 津田好美 谷口勝子 長坂由起子 （以上すべて猿橋中）	松浦英雄 田代八郎 小林寿照 田村 修 坂本 久 加藤 勉 水越幸夫 西室 要 内海 勤 天野寛司 小林基伸 大石勝司 後藤千束 宮幡 活 加藤房代 梶本安恵 安藤喜美江 橋本幸子 村上久美子 佐藤みさ子 （以上すべて猿橋中）	長田哲男 天野敏春 西室忠明 杉本正一 大石良治 西室勝正 奈良重治 落合孝二郎 萩原栄次 鈴木伸二 志村隆治 一杉 勉 鈴木文明 杉本 久 西室富江 藤本早苗 丸田ちず子 高木令子 小笠原秀子 田中紀子 （以上すべて猿橋中）

・以上は事前に登録された名簿で、実際には多少の異同はあったようだ。

図8316 聖火リレースナップ



7) 中央線 線路の付け替え

昭和後期、中央線を複線化するにあたり、町中を通っている線路用地を拡幅することは困難なため、大掛かりな「鳥沢から猿橋小柳町間を新線にする大工事」が行われ、昭和43年旧線を廃止し、**複線化された新線への切り替え**が行われた。町中を通っていた中央線が伊良原の地下を通り、危険な踏切や騒音から解放された。鉄道の跡地は道路となり利便性は向上したが、皮肉なことに、この頃から町の人口減少は**速度を増した**。

図8317 新線と旧線（赤線）

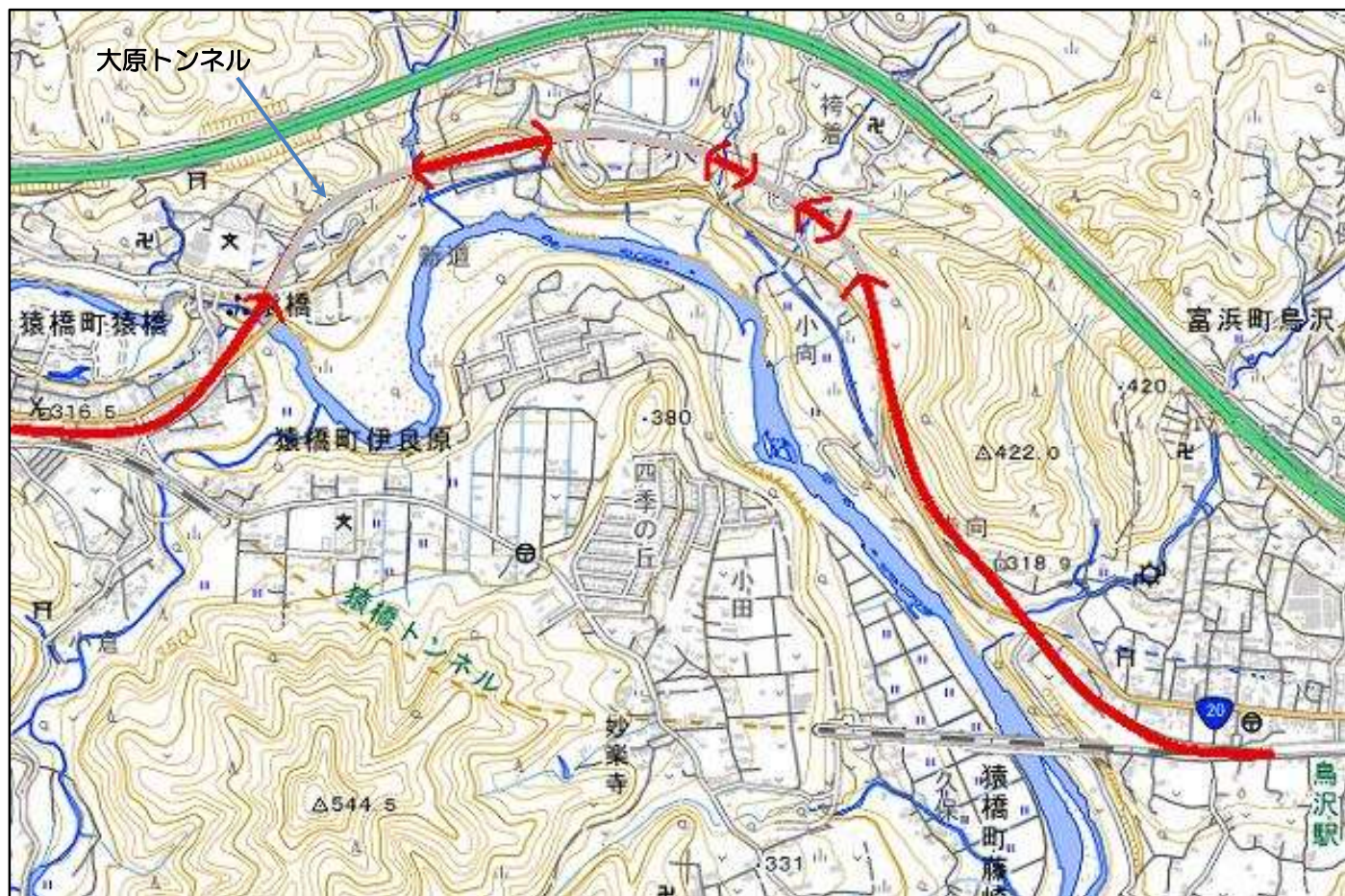


図8318 大原トンネル



猿橋側入り口



鳥沢側入口

図8319 列車通行中の珍しい絵葉書

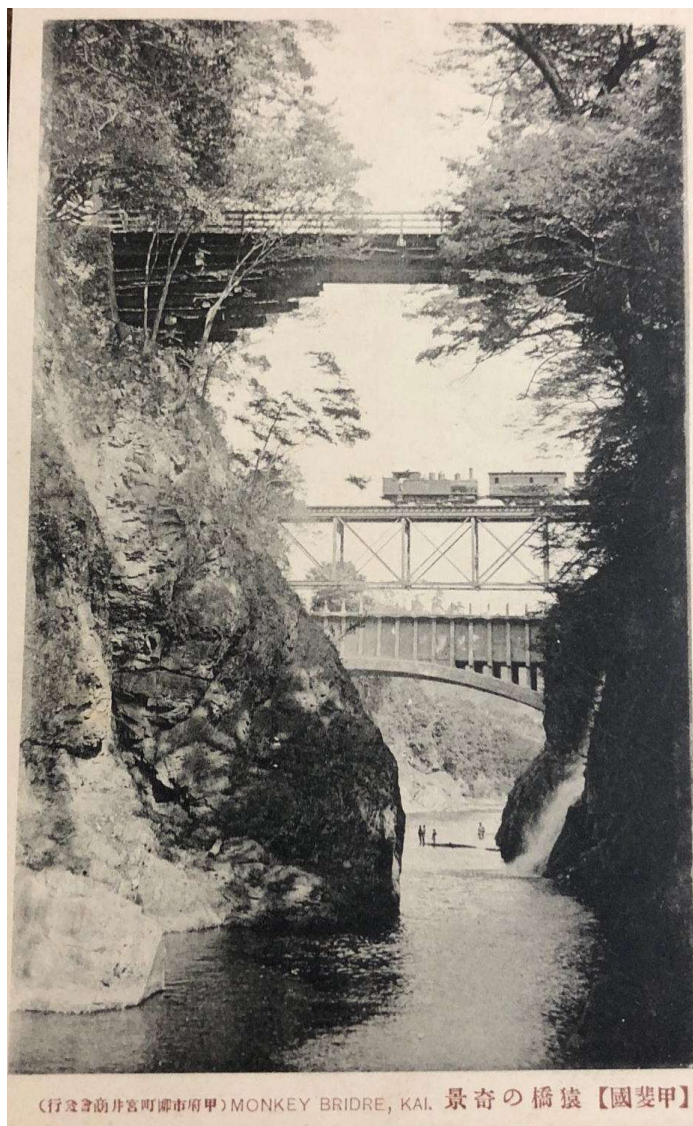
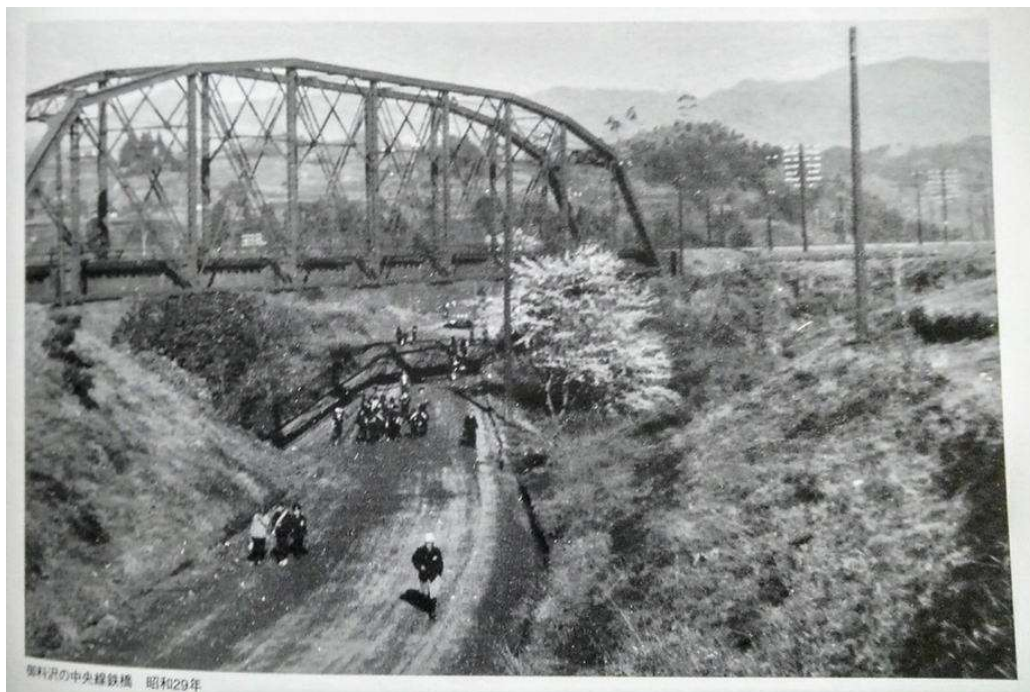


図8320 風景が一変した藤崎久保の集落



図8321 鳥沢入口の坂道と中央線鉄橋 昭和29年 舗装はなし



通行するのは富浜中学生か

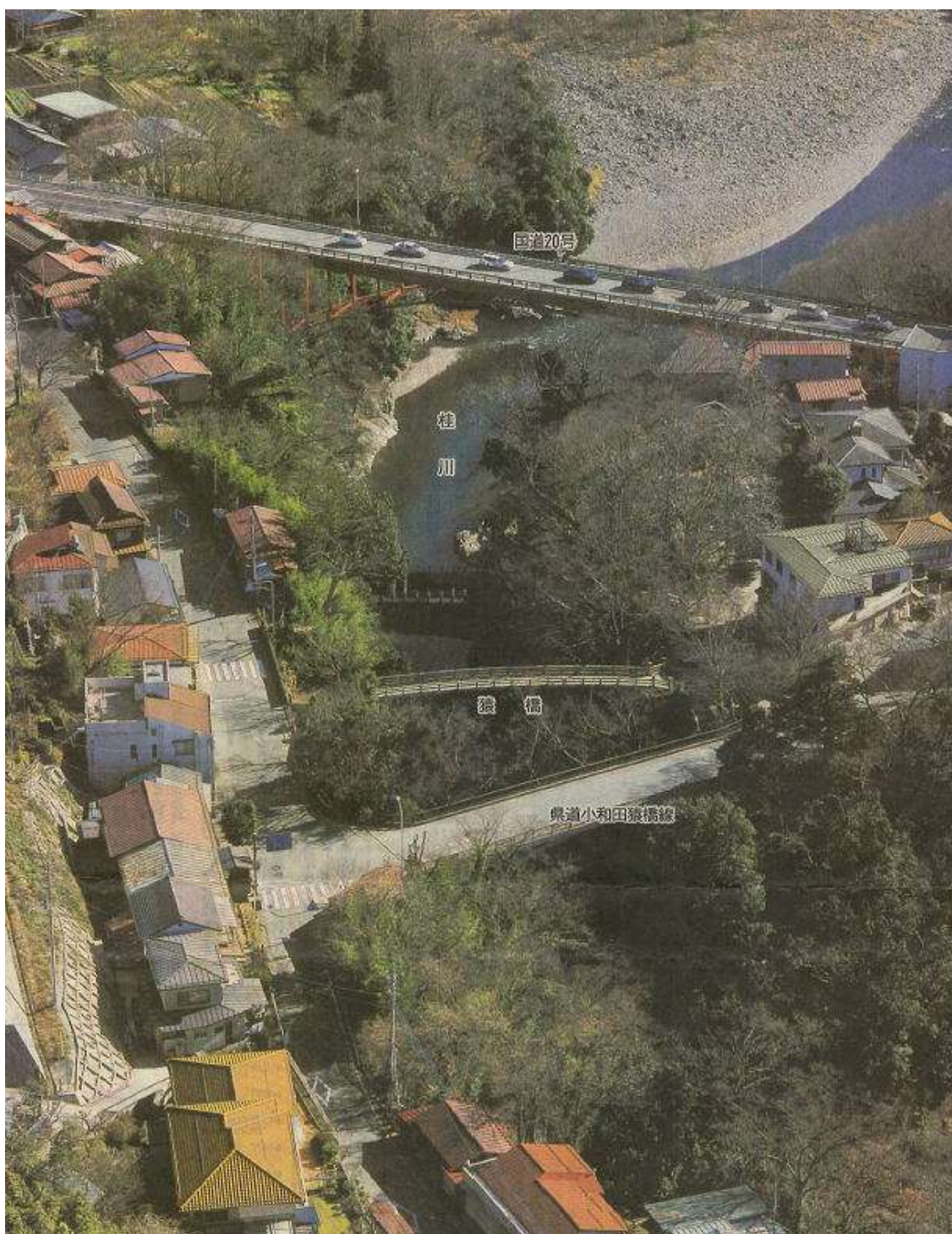
8) 新々猿橋の架橋 昭和48年で良いか？

上記中央線の経路変更とともに猿橋町民にとって画期的な交通体系の変化となった事は新々猿橋の架橋である。

昭和48年、東町から仲町まで、お宮川原の上を直線で結ぶ新しい橋が架けられた。これまで宿場町特有のかぎ形の道路で、2回もほぼ直角に曲がることを強いられていたが、これが解消された。

猿橋の街を通過する旅客には便利になったが、名勝猿橋も見ずに直線でまさに一瞬のうちに通り抜けられる街になってしまった。このため、かつては猿橋の町の中心であった横町通りは脇道となり、この通りにあった店舗が相次いで閉店となり、町の衰退に拍車がかかることになった。

図8322 新々猿橋他3つの橋が集中する猿橋エリア



ここにかつてはもうひとつ、中央線の鉄橋があった。

図8323 新しい「新猿橋」架橋による交通路の激変 昭和48年（1973）

